

【書 評】

楠見 孝 (編) (2010) 『現代の認知心理学 3 : 思考と言
語』 京都 : 北大路書房、xii+299pp.

菅井 康祐[†]

本書は、日本認知心理学会の企画編集による、第1巻『知覚と感性』、第2巻『記憶と日常』、第3巻『思考と言語』、第4巻『注意と安全』、第5巻『発達と学習』、第6巻『社会と感情』、第7巻『認知の個人差』の全7巻からなるシリーズの一部である。本巻のタイトル『思考と言語』と見ると、ヴィゴツキー¹を思い出す方も多いであろうが、本書の内容はそれとは全く異なり、問題解決や判断といった思考に関する問題について、認知心理学ではどのようなアプローチをとり、モデル化するのかということが主なテーマになっている。本シリーズは全巻を通して2部構成になっている。第1部の「基礎と理論」は認知心理学の当該分野を学ぶためのミニマムエッセンスと書かれているが、最新の研究成果も盛り込まれた内容の濃いものになっており、心理学を背景にしない読者がしっかりと理解するには本腰を入れて向き合う必要がある。それに対し、第2部の「展開と実践」ではあらゆる研究・教育に係る具体的な内容も多く扱われており理解しやすく比較的読みやすい。

第1部の4章のうち、第1章「演繹推論と帰納推論」、第2章「問題解決」の章では、認知心理学でよく取り上げられる思考についてのテーマが丁寧に紹介されており、意味論、語用論などに関心のある方は一読しておくべきであろう。また、第4章の「思考と言語に関するコネクショニストモデル」では、脳内情報処理において、言語の生得性を認めない立場として1つの大きな流れであるコネクショニストモデルについてまとめられている。コネクショニズムは、ヒトには生得的に言語習得に特化したシステムを既定するチョムスキーの Language Acquisition Device²に端を発する流と対立するアプローチであり、この章を読めばその概観をつかむことができる。

第2部については、様々な具体的な事象について書かれており、第6章「批判的思考と高次リテラシー」や、第7章「科学と芸術における創造」などは、思考・言語といった研究領域に限らず、研究や教育一般に対する示唆も多く、幅広い読者にとって興味深い内容になっている。言語研究に最も直接的に関わるのは第10章「比喻理解と身体化認知」である。この章では、比喻の理解などについて主に認知心理学のモデルの立場から外観されているが、この分野においては認知文法など言語学の分野においても具体的なデータや、分析の蓄積があるので、それらに対する認知心理学からのアプローチが見てみたかった。最後の第11章「物語理解と社会認知神経科学」では、いわゆるミラーニューロンの働きとして知られるように、物語の理解において、聞き手がその書かれた内容を代理体験する様子や、他者の心理状態を理解するメンタライ

[†]近畿大学経済学部

¹ ヴィゴツキー著 柴田義松訳 (2001) 『思考と言語』 新読書社

² Chomsky, Norm (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.

ジングにおいて受け取り手の性格がどのように影響するという点についての fMRI を用いた研究などが紹介されており、これも言語研究にも大いに参考になる。

本書全体を通して、『思考と言語』という書名や、まえがきの「(前文省略) 学際的研究も含めて検討する。」という表現からすると、心理学以外の分野の研究蓄積に対する言及・考察が少ないが、最新の動向もふんだんに盛り込まれた読みごたえのある専門書である。なお、それぞれの章のテーマにかなり幅があり、全体として順を追って1つの大きなテーマに沿ってすすめる構成ではなく、読み手によって各章の内容に対する親密度も異なると考えられるので、章立てにこだわらず、自身の興味・関心のある章から徐々に読み進めたほうが得るところは大きいように思われる。